

頭塔（西北部）の発掘調査

平城宮跡発掘調査部

この調査は奈良県が行う頭塔の整備復原事業の事前調査であり、すでに1987年に頭塔の東北4分の1の範囲を対象とした第1次調査（『年報1986』参照）を実施している。今回の調査の主目的は第1次調査で課題として残された点、すなわち大量に出土する瓦の使用法、基壇の作り替えと塔本体との関係、塔頂部の施設の有無の確認である。

基壇 今回、西面基壇端の石積みを検出し、基壇の東西長約32mが確定した。北面基壇端に石積みは残っていないが、現下端線と後述する塔頂部心柱痕跡の心との距離が約16mであり、基壇の南北長も約32mであるといえる。西面基壇の石積みは階段状に控え積みされ、東面の石積み法と異なる。また東面基壇石積みの外面にみられた石敷きは、西面にはない。

基壇の構築に3期の変遷があることは、第1次調査で判明している。今回もその事実を確認した。Ⅰ期基壇は、地山面に盛土して構築されるが、今回再調査した東面基壇の上部では、版築法の使用が確認された。基壇上面の塔本体の石積の周囲に犬走り状に玉石を敷き、その外側に一段下げて拳大の礫を幅20cmにわたって敷き詰める。この石敷き化粧は塔本体の第一段石積みの下に潜る。今回検出した石敷き化粧西北隅と第1次調査で検出した東北隅から、北面石敷き化粧の東西幅が24mで、主軸方位が国土座標にはほぼ一致することが確認された。また、両隅部でⅠ期基壇化粧に伴う柱穴P1とP2を検出した。柱穴は石敷き化粧をする前に掘られており、とくに柱穴P1では根巻き石を伴う。柱穴P1の周囲に赤色物質が残っており、当研究所埋蔵文化財センター遺物処理研究室が分析したところ、酸化第一鉄が検出された。柱にはベンガラなどの赤色顔料が塗られていたことがわかった。柱穴部分には石敷き化粧の石がなく、柱穴を設けているところがほかにはないので、四隅にのみ屋根の隅木を支える柱が立ち、この柱の間には桁がわたされて、屋根を支える構造になっていたと考えられる。

Ⅱ期基壇はⅠ期基壇の上に約10cmの盛土をし、上面に細かい礫を敷く。また、第一段石積み近くの礫敷の上に玉石敷きが配される部分もある。この玉石敷きの方位は、第一段石積みの方位にはほぼ一致する。また礫敷きはこの石積みの下に潜る。なお柱穴P1は第Ⅱ期基壇上面からも検出でき、第Ⅱ期でも継続して使用されていたことがわかる。

Ⅲ期基壇はⅡ期基壇の上に盛土して構築する。この盛土の厚さは厚いところでは60cm以上もある。とくに基壇化粧を行わず、直接、盛土の上に塔本体の第一段石積みがある。

塔本体 第一段の石積みは、Ⅲ期基壇上面に築かれていること、またⅠ期、Ⅱ期の基壇化粧が第一段石積みの下に潜ることから、Ⅰ期のものではなく積み替えられたものである。第二段以上の石積みと石敷きには外面的に乱れた部分はなく、第一段石積みだけが積み替えられ、第二段以上は当初の姿をとどめている可能性が高い。

第一段石積みの北面長は24.2mであり、上段に向かうにしたがって約3mずつ長さを減じ、

頭塔発掘遺構図（1～19：既発見の石仏、A～F：新発見の石仏）

頭塔復原案（七重塔案）

第七段では6.2mとなる。各段の現状の検討から、奇数段の高さは1～1.1m、偶数段は0.5～0.6mに復元できる。また各段上面の幅は奇数段が1.1m、偶数段上面は1.8mである。これらの数値は頭塔構築時の計画性の高さを物語っている。各段の上面の石敷きは平坦ではなく、下段に向かって傾斜をつけ、正面からみた場合、中央から両隅部に向かって次第に高くなっている。つまり屋根勾配を意識して石が葺かれている。各段の石敷で第二段の西北隅と第四段の東北隅、西北隅は、意識的に溝状に石を葺き残している。これらの事実とI期基壇上面の石敷き化粧の隅部に柱穴が立っていたことを考え合わせると、段の上面隅部に隅木を置いて屋根を架けていたとする推定は妥当なものといえよう。

塔頂部の遺構 今回は、第七段上面の中央の五輪塔下の調査を行った。五輪塔の台石とその下の板石をはずすと盗掘坑が現われた。盗掘坑は長軸80cmの楕円形で、深さは90cmに達し、和同開珎、神功開宝、隆平永宝が出土した。盗掘坑の下面が、塔本体とは違って、堅くしまっではないことから、さらに精査したところ、下位に直径46cmの円形坑が検出され、その孔壁は堅い塔本体の積土であることが判明した。さらに、2m掘り下げたが、円形坑はなお続きその底面には到達しなかった。円形坑の直径が変わらないこと、埋土に木炭粒と灰が含まれていること、抜取穴がないことから、次のようなことが想定できる。すなわち、塔本体の地下に礎石と舍利荘厳具があり、ここに心柱を建てて、版築しながら安定させる。その後落雷で地上部分(相輪)と地表直下の部分が焼け、それより下位の柱は朽ちてしまったのだろう。

石仏 従来の調査で、各面それぞれ第一段に5体、第三段に3体、第五段に2体、第七段に1体、合計44体が配置されていたことが明らかになっている。XとYの石仏は抜き取られていたが、今回新たにA～Fの6体を検出した。しかし、BとCには石仏の彫刻は認められない。B、C周辺の石積みが乱れていないことから、これらも当初のものである可能性が高い。AとDは既知の8号石仏と同様、数体の化仏が光背状にとりまく独尊坐像である。Eは下半部を残すのみであり、彫刻の詳細は不明である。Fは如来形が主体の頭塔の石仏の中では珍しく菩薩が中心となっている。

出土遺物 瓦と土器を主体とし、若干の金属製品と石製品が出土している。ほとんどが基壇上ならびに基壇外周の包含層から出土した。

瓦は総数168点の軒瓦のほかに、多量の丸瓦と平瓦、さらに若干の駝斗瓦や面戸瓦も出土している。軒瓦の内訳は、奈良時代が159点、平安時代が3点、中近世が7点である。奈良時代の軒瓦の主体は東大寺式軒瓦で、軒丸瓦6235Mが68点、軒平瓦6732Fが83点ある。ほかに重圀文軒丸瓦6012Cが3点、重圀文軒平瓦6572Gが5点ある。軒平瓦の頸部に朱のついたものがあり、茅葺や垂木などで組まれた屋根が架かっていたことを示すものである。

土器は奈良時代のものは少なく、石仏Cの近辺から奈良時代後半の完形の須恵器の壺が出土している程度である。平安時代の土器も少ないが、中国越州窯系の青磁碗の破片がある。量的に最も多いのは石仏供養の灯明皿として使用された平安時代末期から鎌倉時代の土師器の小皿

で、仏龕内や石仏周辺からも出土している。また奈良時代後半の土馬の破片が2点あるが、基壇構築時の混入なのか、頭塔で土馬を使った祭祀が行われたのかは不明である。

金属製品には銅銭5点、銅製金具、鉄釘、鉄片などがある。銅銭中の和同開珎1点、神功開宝2点、隆平永宝1点は塔頂部の盗掘坑から出土した。なお、電磁探査の結果、各段上面の数ヶ所で金属反応があり、今後の調査で地鎮に使用された銭が発見される可能性がある。

石製品としては、後述する推定十三重石塔の一部とみられる凝灰岩製六角石塔屋蓋片1点が基壇北西部の包含層から出土した。そのほか平安時代末期～鎌倉時代の凝灰岩製の石塔類も出土している。

頭塔の復原と変遷 第1次調査と第2次調査の結果から、頭塔は各段の石積みが各層の塔身となり、桁、隅木、垂木で屋根を架け、さらに瓦を葺いていたことは明らかである。たとえば各段上面に屋根を架ければ七重塔になるし、偶数段に屋根を架ければ四重塔になり、最上部に木造の塔身を一層加えれば五重塔になる。基壇には3期の造り替えがあったが、Ⅱ期基壇上面でもⅠ期の屋根の第一層の四隅を支える柱は建っており、Ⅱ期にも瓦葺き屋根が残っていたといえる。なお、Ⅰ期塔身中の心柱の痕跡は未盗掘であるので、この地下に舍利荘蔽具があれば、これも未盗掘のままであろう。

Ⅰ期の塔頂に建っていた木製相輪が失われた後、Ⅱ期の塔頂には凝灰岩製の六角屋蓋石塔が建てられた。平安時代末期の『七大寺巡礼私記』には、頭塔は『十三重の大墓』と記されており、石塔は十三重だったのだろう。塔頂部盗掘坑から出土した銅銭は、おそらくこの石塔の地下の舍利荘蔽具の一部と考えられる。この銅銭の中に隆平永宝があることから、Ⅱ期は平安時代初期、9世紀初頭と考えられる。また、平安時代の軒平瓦の存在はⅡ期に瓦の補充が行われたことを示している。

Ⅱ期基壇上面に盛られたⅢ期基壇土からは、大量の瓦とともに平安時代末期の灯明皿が出土しており、この頃には頭塔の各層の屋根は倒壊し、石仏は露出し、頂部に十三重の石塔を残すのみとなったことが窺える。Ⅲ期のこうした状態の頭塔には、凝灰岩製の石塔が多数安置されるようになり、各段の石仏周辺からは民衆の信仰が継続していたことを物語る大量の鎌倉時代の灯明皿が出土している。

今回の頭塔の西北部4分の1の調査で出土した奈良時代の軒瓦の点数は159点で、東北部4分の1を対象にした調査で出土した奈良時代の軒瓦の点数148点に近い。また、軒丸瓦と軒平瓦の比率は1：1に近く、これらの数値から頭塔の屋根瓦が四方へ徐々に落下していった状況が推定できる。頭塔の南半分におそらく包含されている300点前後の軒瓦を加えると、頭塔の奈良時代の軒瓦の残存個体数は推定600点となる。なお、仮に頭塔の7段に屋根が架かっていたとすると、総計約3000点の軒瓦が本来葺かれていたと推定される。(巽淳一郎・佐川正敏)